

シリーズ 『明日の神話』を知ろう！

『明日の神話』完成への道
「中南米の旅」

連載7回目

1967年7月8日、岡本太郎は、約2カ月に及ぶ中南米旅行に出発した。この旅行の目的は3つあった。そもそも旅行のきっかけとなったのは、しばた映画プロダクションが製作する「新しい旅・岡本太郎の探る中南米大陸」という大掛かりな海外取材である。これは日本教育テレビ(現・テレビ朝日)の番組として中南米の知られざる古代文明と歴史を岡本太郎が紹介するというもの。訪れる国はメキシコ、コロンビア、ベネズエラ、エクアドル、アルゼンチン、チリ、パラグアイ、ウルグアイに及ぶ大掛かりな取材旅行である。その記録は30分番組として週1回12回の放映が予定されていた。

もう一つの目的は、当時カナダのモントリオールで開催されていた万国博の視察である。旅行直前の7月に岡本太郎は日本万国博覧会協会から1970年に開催される日本万国博のテーマ展示プロデューサーの依頼を受けていた。この依頼を受けるか否か、岡本はアジアで初めて開催される万国博の方向性とテーマ展示の意義を見出すためモントリオール万国博の視察をこの旅行に加えたのである。そして三つ目の目的が、メキシコシティに建設中の高層ホテル「オテル・デ・メヒコ」の現場視察である。このホテルは1968年に開催予定のメキシコオリンピックに合わせて完成されるもので、当時、メキシコシティ最大の高層ホテルとなる予定だった。実は中南米旅行以前にこのホテルオーナーであるマヌエル・スワレスが岡本を訪ね、そのロビーに巨大な壁画制作を依頼していたのである。万国博のテーマプロデューサーと異国の地に描く巨大な壁画は、いづれも岡本にとって初の大作である。しかも万国博は3年後、ホテル開業は1年後という限られた時間の中でこれをどうこなしていくのか。その前途多難な大事業を前にしての2カ月に及ぶ中南米旅行は、こうしてスタートした。

岡本太郎ら一行はアテネ、アムステルダムを經由し、パリに到着する。パリでは普通ソルボンヌ大学やミュージゼ・ド・ロム(人類学博物館)を見学、その後、オランダを經由して7月12日にカナダのモントリオールに到着し、万国博の視察を行っている。次いで19日、ようやくメキシコシティに到着した。この時のメキシコ訪問は二度目である。岡本とメキシコとの出会いはパリ時代、友人に見せられた古代メキシコのピラミッドの写真だったという。ピラミッドの石積み祭壇の上で、多くの人が生贄となり、生きながらにして心臓をえぐられ、それを太陽に捧げるという古代の神聖な儀式に感動したのである。この思いを持って1963年に初めてメキシコを訪れた岡本は、古代遺跡や街中にあふれる骸骨などの民芸品に感動し、講演の中で「メキシコというところは、なんて怪しからんところだ。何千年も前から断りもなく私のイミテーションを作っているなんて」と岡本らしい冗談を飛ばしたことがある。

今回のメキシコを中心とした旅行についても「真っ青にはりつめた青空。透明な陽光のもとに、灰白色に静まりかえる古代マヤやインカの遺跡。中南米を巡り、その重く濃い思い出に圧倒された」(『オリンパスフォトグラフィ』1967年11月)と、その印象を述べている。

メキシコシティでは、テオティワカンの太陽のピラミッド、ケツアルコウトルのピラミッド、蝶々の神殿などの遺跡を取材し、また大学スタジアムのリベラの壁画、グラニアの泥棒市、人類学博物館やメキシコ壁画運動の中心的活動家ダヴィッド・シケイロスのアトリエを訪ねている。その後、メキシコのアオハカからサンクリストバル、パレンケ、チェチェン・イツァーを巡り、8月3日にはグアテマラ、そしてブラジルと強行軍の取材を続けた一行は、30日に再度メキシコシティに到着した。この時、巨大壁画『明日の神話』が据えられるオテル・デ・メヒコの建設現場を訪れ、オーナーのスワレスからその壮大な構想を聞くこととなる。

(元川崎岡本太郎美術館・学芸員/大杉浩司)



メキシコのテオティワカン遺跡を取材する岡本太郎

Topics

トピックス

映画「少女の夢～いのちをつないで」
に『明日の神話』登場

9月1日に「2012あいち国際女性映画祭」に出品された映画「少女の夢～いのちをつないで」にNPO法人明日の神話保全継承機構が制作協力しました。昨年亡くなった映画監督・槇坪亨鶴子さんの8作目として企画していたもので、映画後半部分では『明日の神話』が大きく映し出されます。

槇坪さんは「命の尊さ」「自立の大切さ」「共に生きる」をテーマに7本の映画を制作しました。「少女の夢」は、槇坪さんが少女時代に過ごした広島山村が舞台。原爆による後遺症や差別や戦争のトラウマなど、苦しみを乗り越えながら、支え合って逞しく生きる人々の中で、少女が「いのちの尊さ」を知り成長していく物語で、槇坪さんの夫・光永憲之さんと中平悠里さんが共同監督を務めました。

『明日の神話』は、映画のラストシーンで人々の命の輝きを象徴するかのように入場します。映画はほとんどが白黒で展開されますが、『明日の神話』の登場シーンでは、岡本太郎の赤や黄や青が鮮やかにカラーで映し出されます。

中平悠里さんは「『明日の神話』の、あの燃え上がるような炎から魂のメッセージが聞こえてくるような気がするのです。この映画は、明日への希望、生きようとする夢が大きなテーマになっています。まさに岡本太郎の『明日の神話』が放つメッセージと共通するのです。槇坪監督は携帯電話の待ち受け画面を『明日の神話』にしていました。それだけ映画を企画から『明日の神話』に想いを傾けていらっしゃったのですね。映画の中で『明日の神話』は、槇坪監督と共に平和への祈りを届けているのです」と、語ってくれました。

映画を鑑賞した人から監督のもとに「被爆した祖父を思い出した。いのちの尊さを伝えていくことが大切だと改めて思った(大学生)」、「いつかまた故郷に戻ろうと強く思った。勇気もらった(福島原発事故で避難中の女性)」など、感動したという声が多く寄せられているとのこと。

12月8日に渋谷アップリンクの「つながり映画祭」で放映後は、12月29日から広島のシネマイン本通りで2週間のロードショーが予定されています。来年度は、東京、名古屋、大阪でも上映を企画中です。

Topics

トピックス

折り紙で
『明日の神話』

広島県三次市の体験交流施設「こぶしの森体験の館」の折り紙博物館で11月23日、折り紙で制作した『明日の神話』の除幕式が行われました。制作にあたった地元の小学生らが綱を引き、紅白の幕が取れた瞬間、「おおっ」という歓声とともに大きな拍手がわき起こりました。使用した折り紙は、広島市にある「原爆の子の像」に手向けられたもので約3万2千羽を使用。縦1.43m、横4.8mと、実物の約6分の1。

館長の赤城賢治さんは、「岡本太郎先生の『明日の神話』と折り鶴が一体となって、より強い平和への願いを表現してくれました。当館の開館10周年に花を添えてくれました」と話しています。



<写真：中国新聞社提供>

TARO語録 『強く生きる言葉』イーストプレス

他人が笑おうが笑うまいが自分で自分の歌をうたえばいいんだよ。
歌にかぎらず他人の判断ばかりを気にしては本当の人間としての責任がもてない。

